「働くこと」の意味と歴史について考える

2024年11月22日（愛媛県社労士会）

水町　勇一郎

早稲田大学法学学術院

この講演で考えること

❒ 「働くこと」は、あなたにとって、人間にとって、どういう意味をもつのか？ —「働くこと」の意味

❒ 「働くこと」は、人類の歴史上、どう変遷してきたのか？ 人間は、それにどう向き合ってきたのか？

—「働くこと」の歴史

❒ これから、皆さんは、「働くこと」にどう向き合っていくのか？

—「働くこと」の未来

出典) XXXX

Ⅰ.「働くこと」の意味

【問い】「働くこと」は「喜び」か「苦しみ」か？

◎古代ギリシャの「労働」観

○働くこと（必要に迫られて行う物質的な諸活動）

＝ 「不自由」で「卑しい」活動

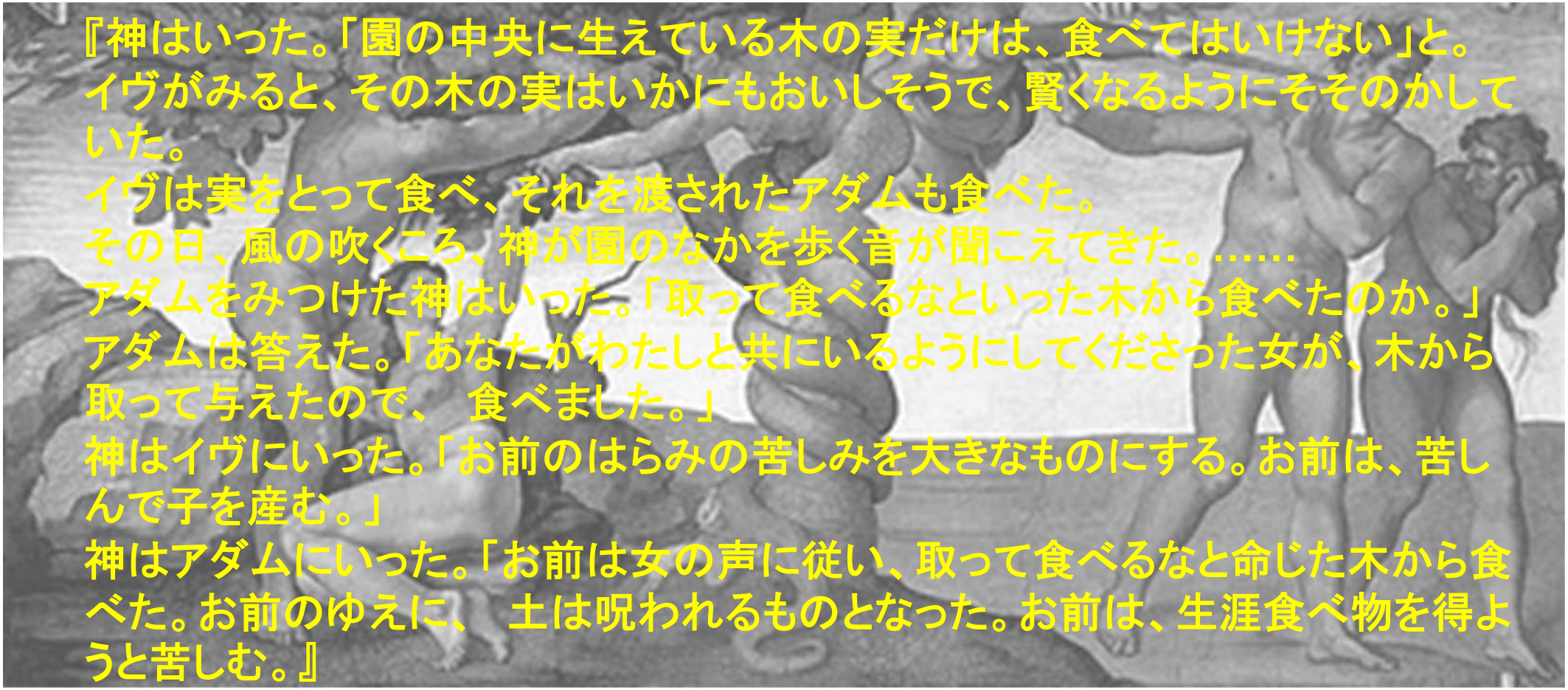
○真に「人間的」で「自由」な活動とは？

＝ 「真」・「善」・「美」

☛人間の「本性」とは何か？

Ⅰ.「働くこと」の意味

◎キリスト教（ローマ帝国下で発展したカトリック）の「労働」観



『神はいった。「園の中央に生えている木の実だけは、食べてはいけない」と。
イヴがみると、その木の実はいかにもおいしそうで、賢くなるようにそそのかしていた。
イヴは実をとって食べ、それを渡されたアダムも食べた。
その日、風の吹くころ、神が園のなかを歩く音が聞こえてきた。……
アダムをみつけた神はいった。「取って食べるなといった木から食べたのか。」
アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、　食べました。」
神はイヴにいった。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。」
神はアダムにいった。「お前は女の声に従い、取って食べるなと命じた木から食べた。お前のゆえに、　土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。』

（旧約聖書『創世記』第三章より〔新共同訳〕参照）

Ⅰ.「働くこと」の意味

○“labor”の意味は？

“Labor Room”ってどんな部屋

○≪travail≫の意味は？

← ≪tri-palium≫

Ⅰ.「働くこと」の意味

◎宗教改革（キリスト教プロテスタント）の「労働」観

「神はアダムに、いたずらに時を過ごすことのないようにと、パラダイスで植え、耕し、守る仕事をお与えになった。これはまったく自由な行いであったし、ただ神の御心にかなうことのためになされた。・・・

ただ、神の御心にかなうようにと、このような自由な行いをすることを命じられているのである。」

（マルチン・ルター『キリスト者の自由』第二二より〔徳善義和訳〕参照）

「もし彼が、彼の身分や職務の中に留まり、求められていることを行うならば、彼は悪い木ではありえない。・・・

神が命じられている行いは、人が決して悪と呼ぶことのできない価値を持つに違いないからである。」

（マルチン・ルター『「山上の教え」による説教』聖マタイの第七章より〔徳善義和・三浦謙訳〕参照）

Ⅰ.「働くこと」の意味

○”Beruf”の意味は？

○”calling”は誰が呼んでいる？

Ⅰ.「働くこと」の意味

○プロテスタントたちが建国したアメリカの「労働」観

cf. マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店、1989）

○カトリックの影響が根強く残っている国々の「労働」観

○日本の「労働」観は？

Ⅰ.「働くこと」の意味

◎日本人の「労働」観の由来

＝「共同体における和」の精神

①日本の風土

Cf. 和辻哲郎『風土』（岩波書店・1935）

②日本の農業技術

Cf. 村上泰亮『文明の多系史観―世界史再解釈の試み』（中央公論社・1998）226頁以下

③日本の地理的条件

Cf. 梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論社・1967）

④日本の宗教思想

Cf. 村山修一『神仏習合思潮』（平樂寺書店・1957）7頁以下、中村元『東洋人の思惟方法 第３巻』（春秋社・1962）64頁以下

Ⅰ.「働くこと」の意味

◎近世日本の「労働」観

○「家業」 ☛日本独特の「イエ」の理念との結びつき

・家族の生活のための「生業（なりわい）」の側面

・社会（世間）から与えられた分を果たす「職分」の側面

← ▢ 荻生徂徠の「全人民役人」論

▢ 石田梅岩の「四民の職分」論

Cf.　平石直昭「近世日本の＜職業＞観」東京大学社会科学研究所編『現代日本社会(4) 歴史的前提』（東京大学出版会・1991）33頁以下

○「家族（イエ）のため、社会のために働く」日本人の意識

→ 「準イエ」としての「会社（カイシャ）」

Ⅰ.「働くこと」の意味

◎「働くこと」の二面性

ⓐ働くことの「社会性」と「経済性」

ⓑ働くことの「他律性」と「手段性」

◎二つの側面から出てくる問題

ⓐを強調しすぎると……

ⓑを強調しすぎると……

⇒ⓐと「集団」が結びつくと……

Cf. 井上達夫『現代の貧困』（岩波書店・2001）160頁以下

Ⅰ.「働くこと」の意味

⇒「働くこと」の多面性と「個人と集団の関係」の交錯のなかで、「働くこと」をめぐって生じている問題をどう捉え、どう行動するのか？

　なぜ、こういう問題が生じているのか、その背景を知る「眼」と、それを解きほぐしていく「知恵・思考」の重要性

Ⅱ.「働くこと」の歴史

【問い】人類の歴史のなかで「働き方」はどう変遷してきたのか？ 人間は「働き方」をどう規律できるか？

◎狩猟採集社会における「労働」

（人類誕生：約250万年前、ホモサピエンス誕生：約20万年前～）

○小集団で生活

○民族的にも文化的にも極めて多様

☜認知革命（約7万年～3万年前）

○労働時間は短く、平等・安定・永続的な社会（＝「原初の豊かな社会」）

Cf. ユヴァル・ノア・ハラリ（柴田裕之訳）『サピエンス全史（上）―文明の構造と人類の幸福』（河出書房新社・2016）、ジェイムス・スーズマン（渡会圭子訳）『働き方全史―「働きすぎる種」ホモ・サピエンスの誕生』（東洋経済新報社、2024）

Ⅱ.「働くこと」の歴史

◎農耕社会における「労働」

（農業革命〔約1万年前〕による農耕社会への移行）

○過酷な労働と生活

○都市革命（約8000年前）と都市での専門的職業の誕生

⇒ なぜ人間は過酷な農耕生活から穏やかな狩猟採集生活に戻れなかったのか？

○生産性の罠（「贅沢の罠」）

○欲求の無限の連鎖（「欠乏の不安」）

Ⅱ.「働くこと」の歴史

◎工業社会における「労働」

（産業革命〔18世紀後半～〕による工業社会への移行）

○家族的工房（家内制手工業）や農村から都市部の大工場へ

○過酷な労働と生活

☜ 社会基盤として市民革命による「自由で平等な個人」による「契約」社会

○「労働法」の誕生（19世紀半ば～）

・「集団」的規制（労働時間規制、社会保険制度等）

・「集団」的自由（集団の自由化と制度化）

☜ 普通選挙制度の導入（仏1848年、独1867年、米1870年）

Ⅱ.「働くこと」の歴史

○「労働法」の発展（20世紀～）

・テイラーとデュルケームとケインズ

➡「工場で集団的・従属的に働く均質な労働者」に対し、「国家（福祉国家）」が集団的・画一的な保護を付与（＝「20世紀モデル」）

➡ 戦後の高度経済成長（経済と社会の好循環＝「黄金の循環」）

○「労働法」の危機

・石油危機・成長鈍化➡「黄金の循環」の反転

・技術革新（機械化・自動化）➡工業からサービス業へ人の移動

・グローバル競争の進展➡不平等の拡大、社会的排除

Ⅱ.「働くこと」の歴史

○「労働法」の変容（1980年代～）

・労働時間規制の柔軟化

・労働者個人の保護（差別禁止、プライバシー保護など）

・労働市場規制の自由化

○「労働法」の政策化・戦略化（2000年代～）

＝労働法・社会保障法・税法を一体化させた総合的政策の推進

・就労促進と人材育成（mutual obligation）

・差別禁止・人権尊重（action plan, accountability, disclosure)

・就労支援、公的扶助、最低賃金、失業手当、税制の一体化（personal support service, basic income, 給付つき税額控除など）

・ ESG投資、人権Due Diligence等と結びついたインセンティブ・システム

Ⅱ.「働くこと」の歴史

◎デジタル社会の到来と「労働」

○働く現場でのAIとロボットの活用

・時間・空間や組織に囚われない働き方

・国境を越えたギグワークの拡大（細分化された個人業務委託）

・人間とAI・ロボットとの仕事の棲み分け

⇨ 人間的な能力＝創造力、想像力、対人関係能力、価値判断

○失業のリスク

Cf.　アダム・スミス、ケインズ、マルクスのユートピア

○不平等拡大、労働強化のリスク

・アクセス機会の平等／情報処理能力の格差

・GPS・ウェアラブルデバイス等を用いた監視による労働強化

・個人情報のプロファイリングによる人事管理（HR Tech）

Ⅲ．「働くこと」の未来

◎これから、皆さんは、「働くこと」にどう向き合っていくのか？

○社会が大きく転換するときに、働く人は大きな苦難に直面してきた。いま、そしてこれから生じる社会の転換をどう受け止めるのか？

・社会の転換のなかでの「法」の役割の重要性

・社会の転換のなかで、働く人、働かせる人、それをサポートする専門家として、変化をどう受け止め、どう行動するか？

以　上